



TITLE:

星を忘れた國民!!: 卷頭言

AUTHOR(S):

山本

---

CITATION:

山本. 星を忘れた國民!!: 卷頭言. 天界 1935, 15(174): 445-445

ISSUE DATE:

1935-09-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/167116>

RIGHT:

# 天界

第百七十四號 (第十五卷)

(昭和十年) 十月號

## 星を忘れた國民!!

(卷頭言)

近頃、大阪の有力者と學術振興會の合作で、“災害科學研究所”といふものの設立が計畫されてゐるのは誠に喜ばしいことである。こんなたちのものは、平常から災害の多い我が日本には、既に早くから考へられてゐなければならなかつた筈であるが、とかく、ものの研究を怠つて、只、事件が起つてからイロイロと騒ぎ出すといふ人が世には多いので、こんなに立ち遅れて了つたものと思ふ。——それでも、遅ればせにも、出來た方が良いので、吾人は決して此の計畫を茶化さうとは思はない。しかし、只一つ吾人の胸に落ちないことは、あらゆる天災の原動力である「太陽」といふものを、此の計畫中の研究所は、未だ其のプログラム中に考へてゐないらしい點である。太陽なしに災害の研究をするといふことは、源泉をきはめないで治水策を講ずることに當るのだから、其の不徹底さは、マルデ災害の研究などをしないのと同じである。何とかして識者中に此の點に氣がついて貰ひたいものである。

尤も、吾が日本は、明治の初年以來、妙に天體の存在を忘れて了つて、それでゐて、天につながる種々の行事をやるといふ風に見える。哲學者が宇宙のことを知らずに思想界に君臨しやうと企てたり、宗教家が月や星の正しい認識無くして先師の教理を説かうと試みたり、「神國」とは言ひながら、開國以來の我が日本の偉人たちが如何に天地宇宙の理を體驗してゐたかを全く辨へない有様である。甚だしきに至つては、カンジンの牽牛織女が何れの星であるかを知らないで、平氣で「七夕」まつりをやつてゐる徒輩が多い!! 古來二千年間、日夜御厄介になつた「月」のことを全く忘れて、お盆や御節句の行事だけをやつてゐる。

實に、ハヤ、皆がどうかしてゐるのだ! 會員の責任自覺を促したい。(山本)